



カントウータ

Cantuta

No. 40



サンタクルス遠景；ホテル ハミルトン・パイ・ヒルトンより（撮影者 渡邊 英樹）

1. 2018年8月：ボリビア回顧旅日記
（その6） 渡邊 英樹
2. 日本人が見たりべラルタ ーその2ー 大島 正裕
3. 首都ラパスで、水わずか30リットルを
使った入浴体験 城井 香里
4. ボリビアでの新型コロナウイルス：
蔓延とその対応状況 杉浦 篤

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA
<http://nipponbolivia.org>

1. ボリビア回顧旅日記

(その6)

日本ボリビア協会相談役
元海外移住事業団ボリビア駐在
渡邊 英樹

8月14日(午前)

本日はお昼まで予定がなく、雨雲もやって来ているので、ハードスケジュールを乗り切ってきた身体を休めるため、午前中は休養に当てる。雷雨があり、オキナワの式典行事の間の快晴で暑かった気候が、一転して涼しくなる。

久しぶりにオキナワとサンファン両コロニアを訪ねたことに触発されて、昔の事ごとが次から次へと鮮明に蘇ってくる。やはり革命等のことは避けて通れない。政治的混乱期の思い出はいくらでもある。

革命

この時期の南米大陸は、米ソ冷戦の代理戦争的な紛争が、至るところで起きていた。ソ連の後ろ盾で左翼政権が樹立されると共産党のオルグ4~500名がソ連大使館に入ったと言われていた。

ペルーでもチリーでも同じ状況であったから、ペルーのリマの空港では駐機しているソ連のアエロフロート機が必ず目に入ってきたし空港のロビーもソ連人で溢れていた。

その状況をアメリカと気脈を通じた軍部が軍事クーデターでひっくり返し、右翼政権が成立するという闘ぎ合いが繰り返された。

また、民間でも、サンタクルスには、スペインの独裁者フランシスコ・フランコ政権を支持するスペイン系移民中心のフランコの政党の「ファランヘ党员」と名乗る極右勢力が

あり、革命の時には、空港占拠のためにイスラエル製の最新式の自動小銃を抱えて飛び出して行く連中がいた。

右翼クーデターの時には、ラジオ放送でも「ファランシスタ」という言葉を何度も耳にした。1969年から1971年の2年間だけで4回も政権交代が起きている。その内の3回は軍事クーデターである。笑い話的であるが「革命を観たければ、3ヵ月間ボリビアに滞在すれば良い」とアメリカの旅行ガイドブックに書かれていたという時代であった。

特に、着任した1969年は3回も大統領が替わった。国民的人気が高く、軍部・農村双方の支持を得て1966年の大統領選挙に勝ったレネ・バリエントス大統領が4月にヘリコプター墜落事故で死亡し、副大統領であったシーレス・サリーナが大統領に昇格した。

着任してわずか半月後の1969.8.6の独立記念日にはサンタクルス市の中央広場で、シーレス・サリーナ大統領も出席して記念パレードが行われた。パレードには星条旗にドクロのマークを付けて反米感情を煽っているのに驚かされた。



写真1-1 レネモレーノ大学の塀によじ登って撮影した独立記念日のパレード・手前の背広姿の男性は、日本人ボリビア移住100周年記念式典の会長を務めた武田健司さん。(1969.8.6筆者撮影)

しかし、この数日後にはオバンド将軍の無血クーデターによってサリーナ大統領は、国外に去った。もともとバリエントスのヘリコプター事故もオバンド将軍の陰謀であるというのがもっぱらの巷の噂であった。事故現場の不自然さがしきりに話題に上っていた。

東西冷戦のまっただ中で起きたこの事件は、私には単にボリビア国内のいつもの権力闘争による政変とは思えなかった。バリエントス政権下で、米国のグリーンベレーの協力を得たレインジャー部隊によって1967.10.9にチェ・ゲバラが殺害された。オバンド将軍のクーデターは世界的英雄であったゲバラの死に対する東側陣営の総力を挙げた弔い合戦ではなかったかと想像をたくましくしたのだった。

農地改革と移住地侵入

その後オバンド大統領は、米国のガルフオイルを国有化して一層の左翼化を推進した。左翼政権になると必ず打ち出されるのが「農地改革」である。「ラティブンディオ(大土地所有)反対」を掲げた集団が、日本人移住地に不法侵入してきた。

サンファン移住地の農業試験場の奥の将来の飛行場予定地としていた土地に侵入した事件の現地裁判では、サンファンの自治体の代表や事業団職員が、100人以上の侵入者に取り囲まれた。侵入者は「ここは我々の土地だ」「日本人は出て行け」と叫び、マチェテ(蛮刀)を空に向かって突き上げた。

裁判には勝ったものの、判決どおりに執行をしてくれないから、何も解決にもならない。日本からは「裁判に勝ったのにどうしたの

か?」と言って来る。東京本部との温度差に悩まされることになる。

不法侵入者に金を払って出て行ってもらうのか?その金を誰が出すのか?残るのは、自ら武装して追い払う以外に解決策はない。しかし、それをやったら国際問題になる。そんなジレンマの連続であった。

サンタクルス市近郊で野菜栽培を営んでいた沖縄県出身者の土地にも侵入して来た。

おそらく、番犬が吠えたのであろう。これに学生運動が絡んで「日本人が、我々を犬で追い払った」とラジオでアジ放送をしきりに流す。さらに「日本人移住地の病院は我々を見殺しにする」などと喧伝し始める。

腹に据えかねて、レネモレーノ大学の学生運動のアジトに乗り込む決心をした。この時だけは、いつも私に喜んで同伴してくれるボリビア人のオスナ職員も、恐れをなして付いてきてくれない。顧問料を払っていても、ほとんど仕事のなかったエミリオ・ウルタード弁護士に同伴を頼んだ。さすが弁護士、快諾してくれた。

大きな教室が身動きできないほどの学生で埋め尽くされた。その殺気だった熱気の中で、ウルタード弁護士が、日本人移住地の診療所は、日本人の診療しか出来ないことが、日本とボリビアの移住協定に明記されていることを説明した。代わって、毒蛇に噛まれたとか、事故等で命に関わる緊急の場合には人道上、ちゃんと対処していることを私が補足した。

さらに、入植当初、半年間で15名もの犠牲者を出した「うるま病」のことも触れ、あらゆる苦難を乗り越えて今日の姿にたどり着いたので、最初から道路等があったところに

入植したのではないことを話した。

続けて、日本人が開発したコロニアの利便性を利用して、その周辺地域で、多くのボリビア人が生計を立てられるようになったことを説明した。その結果、幸いにして翌日から煽動的なアジ放送はピタリと止まった。

しかし、不安定な政治情勢は、コロニアの将来を暗いものにしていった。

ボリビアの将来に希望を持ってないと判断し、コロニアを離れ、ブラジル等に転住するか、または日本へ帰る家族が続出した。

日本人会も独立記念日には「日本人移住者はサンタクルスの市民と共に」の横断幕を掲げ行進し、友好の増進に懸命に努めた。



写真1-2 独立記念日の中央広場でのパレード
前列左から林英次、筆者、富田実、石沢登志雄
玉城政福の各氏、石沢氏の後ろに伊集朝規氏

植民院総裁レメイトレ大佐とのこと

そんな中で、日本人のボリビア社会への貢献を一番理解してくれていたのが、ボリビア東部地区の開発を目指して内国植民政策を推し進めていたボリビア政府の植民院総裁・レメイトレ大佐であった。

ご自身が政策を進めて行く上でどれだけのインフラ整備をしなければいけないかを理解されており、それが、ほとんどされていない

状態で、未開の地に入り、開拓して来たサンファンとオキナワのコロニアを高く評価されていた。

ボリビア政府が、財政難から外国人登録法を改めて、登録の更新に、ひとり当たり20ドルの登録税を課した事があった。

その時、彼は、日本人が、どれだけボリビア社会に貢献したかに言及してくれて、登録税に反対する論文をコチャバンバ市の新聞に投稿して、その新聞を私に送ってくれた。

レメイトレ大佐は、ドイツ系の軍人であった。私が赴任した時のサンタクルス支部長の澤地隆治さんも元陸軍中尉であったから、二人はお互い心を許し合う良い関係にあった。

ボリビアからパラグアイ支部長に転勤する澤地さんから「私が代わって大佐との良好な関係を維持せよ」と命令された。日本人移住地への不法侵入が拡大しないようにするためには大佐の協力が是非必要であったからだ。



写真1-3 帽子を被った植民院総裁レメイトレ大佐夫妻(1969筆者撮影)

ところが、事態は思いもよらない方向に展開した。そのレメイトレ大佐が、1970年に他の二人の軍人とともに、左翼政権打倒のクー

デターを起こし、一旦は、大統領府に入り、3人による合議制政権を発足させる旨の宣言をしたのである。しかし、ソ連政府の後ろ盾を得た空軍のファン・ホセ・トーレス将軍が、左翼政権の継続を掲げて、大統領府を空爆した。この時、ラパスの日本人会館も戦闘機からの機銃掃射の流れ弾で、窓ガラスを割られている。

やむなくレメイトレ大佐は、大統領府に入って数日後に、隣国パラグアイのストロエスネル大統領を頼って亡命した。そして、亡命先に生活費を届けに行った大佐の長男が尾行されて、パラグアイの首都アスンシオンで銃撃され、負傷してしまう事件が起きた。

恐らくパラグアイにいる澤地さんとレメイトレ大佐の相談の結果であろうが、澤地さんから連絡が来て私がレメイトレ大佐の親族から極秘に生活費を受け取るようになった。

親族から受け取った現金と同価値のドル小切手を私が、パラグアイの澤地さんの知人に送る。その彼は、私の小切手を直接渡さないでパラグアイ通貨に現金化して大佐に渡すという段取りにした。

1971年ウーゴ・バンセル・スアーレス大佐がホセ・トーレス政権を倒して右翼政権を樹立した。この革命の戦闘は激しくサンタクルスでも、あまりの銃声の激しさに我々も事務所の床にガバッと伏せたこともあった。

決着がつくまでに数日を要したので、末永支部長と西野オキナワ事業所長は、もし、バンセル大佐の革命が失敗に終わった時には、私の身に危険が及ぶ恐れもあるとして、私をブラジルに逃す算段をしてくれていた。

革命成功の直後にレメイトレ大佐はパラグ

アイからサンタクルスに戻って私を訪ねてくれたが、新聞で報じられていた「パラグアイから革命軍に自動小銃100丁が提供された」という件について大佐が関わっていたか否かは聞きそびれてしまった。

そして、大佐は日本人移住地のどこかにご自分の「終の住処」を設けたいと希望されたので、私も協力するつもりでいたが、残念なことにコチャバンバ市内の交通事故で亡くなってしまわれた。(合掌)

暗殺者のリストに

ボリビアでの最もいやな思い出も忘れ去ることなく脳裏に浮かぶ。1974年に帰国して私は、その年発足したJICA（国際協力機構）の職員となったが、2年半余の勤務で退職して、日本とボリビア双方の出資者に請われて、日本とボリビアの合弁会社で木材加工と家具製造をする会社の社長として再びサンタクルス市に赴任した。

政治的混乱の上に、極右、極左双方のテロ事件が世界のあちこちで多発していた。中米ニカラグアで、インシンカ社の日本人社長が誘拐され、殺害された事件があり、日本大使館から、出社時間とルートを毎日変えるようにとの連絡を受けて、それを実行する日々が続いた。夜遅くに、後続車がいたときは、赤信号で止まらないで、そのまま突走ったこともあった。

そんな状況下で、会社のホセ・ミランダ顧問弁護士が「渡邊の名前が暗殺者のリストに載っているらしい」との情報を得てきた。どうして、そういうことになったか訳が分からない。

直ぐに、ボリビア側の出資者であるホセ河合氏に相談した。ご本人も、間一髪で誘拐を逃れたこともあるので、一旦、緊急避難として直ぐに日本へ帰国するように勧められた。

その間にできる限り情報を集めてくれるという。一時帰国中の連絡で、分かってきたのは、二つのことであった。



写真1-4 大量に集まった銘木・南米紫檀の原木の山

一つは、長期の長雨で原木の伐採が進まず、道路の悪化もあり、原材料の調達に苦しんだ年があったが、私の会社だけには、原木が十分に入ってきた。原木運送業者への配慮と支払い方法等の結果であった。同業他社からは分けて欲しいとの要請も受けた。

ここで妬みを買ったらしい。二つ目はその妬みを持ったものが、私を陥れようとして、「彼は、共産主義者である」と極右勢力にほめかしたらしいということであった。

左翼政権下で、後に国外逃亡した極左翼政党の日系の国会議員が工業団地視察で我が社にもやって来た。

その時、私が「労使協調」というような日本式経営方針を説明したのもいけなかったらしい。民主主義国家の日本では、当たり前前の発言も危険思想視され、私自身も、サンタク

ルス商工会議所の会合で、出席者が在サンタクールの日本領事を「共産主義者」と決めつける発言を聞いて唾然としたこともある。

日本の自由民主党のリベラル派でも、ここでは共産主義者と決めつけられるであろうと用心していたのであるが、失敗した。リークした人間も、「あのスペイン系か」とほぼ確信的に想像できた。なぜなら、国会議員を案内した中に彼がいたからだ。その彼は、我が社の機械設備を投資法に違反する中古機械であると見抜いて糾弾もしていた。

彼は、それを社長である私がやったと見て、「新規事業には膨大な設備投資の減価償却費が重くのしかかる。中古設備を入れるのは、同業者間の公平な競争原理を損なうもので許しがたい」と正鵠を射る指摘をしていた。雇われ社長の悲しさ、実は、私自身は着任して設備を見るまで、まったくそのことを知らなかったのである。その後も、日本側の株主のこういった狡っ辛い経営体質にはウンザリとさせられどうしとなった。

そこで、すべての事情を親友の森林会議所のウンベルト・カステード事務局長に説明して、さらなる情報を集めて欲しいと頼み、ボリビアに戻った時には、誤解を解いてもらうように協力を依頼した。彼はそれを見事に成し遂げてくれた。

彼は、半年後にサンタクールに戻った私に対して、事前の打ち合わせは一切なしで、極右勢力と共謀して、二回も私にトラップを仕掛けた。そのトラップに私が二回とも乗らなかったことによって誤解が解けた。

彼自身もすごいリスクを冒したと思う。

スペイン語の先生

苦い思い出は、いい思い出で消したい。私の最初のスペイン語の先生はニェッカ・ロッカ嬢であった。「ニェッカ」とはムニェッカ(人形)の縮小形で、本名ではないと思うが、「ニェッカ」と言えば彼女のことでありと街中で通じた。ミス・インターナショナル代表の候補者のひとりでもあったから知らない人はいなかった。



写真1-5 Srta.ニェッカ・ロッカ (1970年筆者撮影)

黄色人種蔑視が、あからさまにあった頃である。道を歩くと「Chino cochino!」「汚い中国人!」という言葉が飛んできた。理由のよく分からない幼い長男は「中国人じゃない。ボクは日本人だ」とヤジに言い返していた。

ブラジル銀行総裁のパーティーに招かれた時には、「Por qué japuco está aquí?」「なんでジャップがここにいるのだ?」と言われ、悔しい思いもした。一方で「ニェッカから個人レッスンを受けている」と聞くと、白人の男どもは、目をまるくした。それからは私に接する態度に、どことなく変化があったような気がした。

テクノクラート達

1969年の着任当時は、サンタクルス市の中心部でも週に2回の停電があり、ノーベル・ランプで灯火を取っていた。電気のある日も電圧が弱いため、新聞を読むのにも苦勞した。

また、電気で温水にするシャワーも役立たず、温まらない水同然のシャワーを浴びていた。冷蔵庫は石油ランプの灯心を燃やして冷媒管を温めて気化させて冷却させる石油冷蔵庫であったが、ボリビアの家庭では、ステイタスシンボルであつたらしく、どこの家でも応接間に冷蔵庫がデンとおいてあつた。

この状態が1970年になると大幅に改善された。サンタクルス州で天然ガスが採掘され、アルゼンチンへ輸出するパイプラインが敷かれ、火力発電所も建設され、一気に電力事情が改善された。

経済的に豊かになったことから、インフラ整備の公共事業等が活発化し出した。これに伴ってアメリカ等で勉強した青年達が戻って来て、テクノクラートとして公共事業局等で指導的役割を担うようになった。

彼らは、日本の経済成長も良く理解していたこともあり、「トヨタ、日立、ソニー等は、日本を占領したアメリカの資本家達が設立した会社で、勤勉な日本人を労働者として使って良い製品を作っている」などという偏見を信じていなかった。

そんなこともあつてか、彼らのグループが、パーティーを催す時には、毎回、仲間同然に声を掛けてくれた。私の下手なスペイン語にもフレンドリーに耳を傾けてもらい、居心地のいい時間を過ごすことができた。

(次号へつづく)

2. 日本人が見たりベラルタ

—その2—

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員

大島正裕

1. コロナ禍とベニ県

前回の最後に、リベラルタへの日本人の転住について詳細に報告すると予告したが、やはり現在のコロナウイルスの蔓延について一言あるべきだと思ったので、ここに急遽付言しておきたい。

コロナ禍は、アマゾン地域に確実に迫ってきており、4月下旬に入ってからベニ県の首府トリニダで感染者が発覚してから、感染者は徐々に増え始め、5月7日のロス・ティエンポ

(Los Tiempos) 紙によると、ボリビア全土で1,802人の感染（この内86人が死亡）中、商業の中心でハブ空港もあるサンタクルス県が感染者1,083人（死者46人）、次いでラパス県253人（死者16人）、その次にベニ県で212人（死者7人）と報告されていた。ボリビア政府の公式サイトであるBolivia Segura COVID-19には、県ごとの感染者数や死亡者数が随時掲載されているが、それから約1か月後の6月1日時点で感染者数はなんと10,531人、回復1,137人、死者343人と著しい拡大の兆候を見せた。ブラジル、ペルー、チリ、エクアドル、及びコロンビアが中南米の中で被害大であり、その中のブラジルと国境を接し、人の往来が活発なサンタクルス県やベニ県からじわじわと内陸に感染が拡大しているようである。5月のボリビア保健省の発表では、ベニ県で1,200人以上の感染者が報告され、トリニダ、サン・イグナシオ、グヤラメリン及びリベラルタでの感染危険度が高まった。これを受けて、リベ

ラルタでは、5月24日から30日まで、感染防止のため市を封鎖した（encapsulada）。この「封鎖」というスペイン語はencapsularという動詞を使う。文字通り上から街をカプセルで包み込むという意味で、外部との関係を遮断する強い語感があるのだとボリビア在住の友人が教えてくれた。しかし、この地域の外部との関係を遮断するとカネの流れも止まり、食料等の基礎物資の供給にも問題が生じる。中央政府による資金援助も並行して検討されている様子であるが、飲料水や薬剤・医療機材の不足等、この地域の状況の厳しさは日に日に増している。そして、リベラルタは、6月12日から2度目の封鎖措置に入るとい

う。なお、6月12日時点でのBolivia Segura COVID-19によると、これまでのボリビア全土での感染者数は16,929人、回復2,431人、死者559人。この内、最も被害が大きいサンタクルス県では、感染者総数10,536人、死者265人。第2位のベニ県は、感染者総数2,927人、死者139人である。なお、6月12日時点の新規感染者もサンタクルス県の409人に次いでベニ県は118人と多く、依然として緊迫した状況が続いている。

2. 疾病と日本人移住者

感染症については、ボリビア北部ではチクングンヤ熱（Chikungunya）等もあり、更に問題なのが医療機関の脆弱性である。現在でも医療設備の問題や医療従事者の不足が恒常化しているくらいだから100年前の初期の日本人移住者はとても苦労したに違いない。特にアマゾン地域は、初期の日本人移住者にと

っては厳しいものがあり、（ベニ県ではないが）ペルーからボリビアのラパス県マピリ川方面のゴム林に入った最初の 93名の日本人は、間歇熱、すなわちマラリアに苦しんだと記録にあるし、更に彼らの雇主は契約に反して医師をゴム林に配置しなかったという。

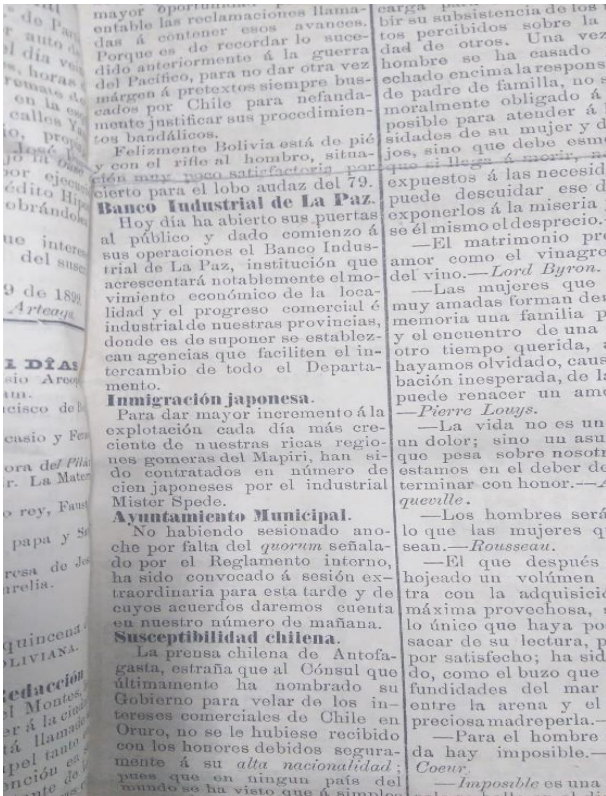


写真2-1:1899年の最初の日本人移住について言及した地元紙 (El Comercio, 1899.10.10) : 著者撮影)。管見の限り日本人移民についての初めての報道か。

「日本人移民」と題され、マピリ川のゴム地域でスピーディ氏により100人の日本人が雇用された、とある。

リベラルタについては、1910年代にこの地に何度も出入りした堀内伝重が書き残したところによると、疾病の欄に「肺結核、熱帯性腫瘍及び潰瘍、プチチエ」とある（『聖母河畔の十六年』）。プチチエ (Putties) とは微生物の名前であり¹、おそらく風土病なのだろう

¹ プチチエが微生物であることについては、本協会杉浦氏から感染症専門家に照会いただき確認いただいた。ご厚情、感謝申し上げます。

うが、戦後のオキナワ移民の苦難を象徴するような「うるま病」の悲劇が思い起こされる。移住者にとっては感染症であれ、風土病であれ、常に未知の病原菌と対峙することが要求された。しかし、その恐怖たるや、我々も今のような状況だからこそ想像できる。

ところで、こうした厳しい環境の中で冒険を続け、移住地を拡大していった初期の日本人移住者は、ほとんどが、もとは農業に従事していて、医師は稀であった。1970年の『日本人ボリヴィア移住史』には、1921年（大正10年）時点のボリビア全国の日本人の職業別表が掲載されているが、多くが農業

（167名）、食料品販売（117名）、あるいはゴム採取（93名）に従事している。ボリビア全土に日本人「医師」はたったの1名とある。興味深いのはこの貴重な「医師」の就労場所が「聖母川」とあることである。「聖母川」は、「マドレ・デ・ディオス川」の雅な和訳であるが、この職業別表を見ると大多数の日本人がリベラルタ周辺に集い、農業、小売店等に従事していた。

堀内によると、1911年のリベラルタの人口は、4,020人（男性2,350人、女性1,670人）でこの内、外国人は280人、日本人は68人を占めており（何と全員男性）、外国人中、最大数の人口に成長していた（因みに外国人集団の2位グループはスペイン人（55人）、3位はペルー人（48人））。ここに幾つの病院があったかは不明だが、堀内が引用する地元紙ノロエステ (Noroeste) 紙によると、1912年1月～9月のリベラルタ衛戍病院の入院患者数（入院患者数、平癒退院者数、死者数、月越現在患者数）の推移がわかる。「衛戍」地とは軍の

駐屯地を指すので、軍管轄病院ということだろうか。

毎月10～20名が入院し、ほとんどが平癒して退院しているが、毎月1～2名の死者が出ている。病気の内容や国籍別の数字はないため、これ以上のことはわからないが、堀内は「リベラルタの歴史」と名付けた冊子（堀内はこれをスペイン語で作成していた、これをのちに堀内の遺族の努力で和訳され『聖母河畔の十六年』に包含された）にこうした統計を意識的に引用しているところを見ると、この地域の疾病に当然の如く関心があったのではないかと思われる。『日本人ボリヴィア移住史』によると、1918年頃にはリベラルタの日本人口は700人に達した。これほどの人口が集まり、他国人を圧倒する人数に増え、且つ商業的にも日本人が発展してきたのは、リベラルタの周囲に河川網が発達していたことが大きく、初期の頃の移住者は、比較的自由にペルー、ボリビア及びブラジル間のアマゾン地域を往来していた。こうした国境の自由な往来は現在でもある程度残っているのだろうが、そのような柔軟さがコロナ禍のような感染症が発生すると途端に感染拡大となって現れてくる。しかしそれでも初期の日本人移住者は、アマゾン地域を右に左に移動した。リベラルタの名声を聞きつけてどのように日本人は集まってきたのか、それが前回からの続きである。

3. ペルーからボリビアへ

ペルーのアマゾン地域に拠点を持つ米国系のインカ鉱山会社はアマゾン地帯のサント・ドミンゴ（Santo Doming）なる地に拠点を構

え、金の採掘等行っていたが、19世紀の終わりに米国で自動車が発明されると、そのタイヤ用ゴムの需要が急速に高まり、ゴムの原産地であったアマゾンは俄かに活況を呈することになる。

1910年の在ペルー日本領事館の相羽恒次副領事の「秘露国「タンボパタ」護謨林視察復命書」によると、インカ鉱山会社は近郊を探索した結果、タンボパタ（Tambopata）川周辺に大規模なゴム林を発見した。そして、同社はペルー政府と交渉し、タンボパターサント・ドミンゴ間の道路を整備する条件でタンボパタ近郊のコンセッションを得ることに成功、ゴム業界参入を目指してインカ・ゴム会社（Inca Rubber Company）を創設し、タンボパタ近郊のアスティジェロ（Astillero）に拠点を定めた。同社は、周辺の道路を整備する等インフラを整備していったが、問題はゴム液を採取する人員の確保だった。ここに目を付けたのが、最初のペルー移民導入計画を牽引した森岡商会ペルー事務所の代表田中貞吉だったらしい。

先に紹介した堀内伝重の『聖母河畔の十六年』には、伝重の兄の良平の序が付されているが、その中で田中貞吉がペルーのインカ・ゴム会社に対して800名を送る計画があり、その前段階として田中が「秘露開発会社」なる新会社設立を発起し、良平もその設立に際した出資者だったと書かれている。この秘露開発会社については、田中が南米での移民業務に携わる前に富山中学の校長をやっていたときの教え子のひとり横山源之助も書き残していて、森岡商会のペルー側業務を一手に引き受けて独断的ふるまいが多かった田中が、森

岡真社長と袂を分かち際に設立した会社と思われる。但し1905年に田中が一時帰国中に急逝したため、結局800名の日本人契約は実現しなかった。



写真2-2:地図出典:Gamarrá Téllez, María del Pilar, *Amazonía norte de Bolivia economía gomera (1870-1940) Bases económicas de un poder regional. La Casa Suárez. La Paz, Biblioteca de Bicentenario de Bolivia, 2018, p.111.*

その後、インカ・ゴムへ日本人労働者を供する役割は、明治殖民会社に受け継がれた。そしてこの明治殖民会社がインカ・ゴム会社に対して1905年から日本人を送りこんだ12名がタンボパタ川流域で就業を始める。このタンボパタ就労者の一部がリベラルタに流れていくのである。相羽副領事は報告書に次のよ

うに書いている。

「本邦移民ノ「インカ」護謨会社ニ雇用セラレタルハ曩キニ明治殖民会社カ五ケ年間ニ五千名ノ移民ヲ送ルノ契約ヲナシ其第一回トシテ去ル四十年〔明治40年〕1907年：著者補足一百名ヲ送出スルニ先チ之カ受入準備ノ為メ其前々年即チ三十八年〔1905年：著者補足〕十二月同会社ニ雇ハレ里馬〔リマ〕市ヨリ入山シタル十二名ノ移民ヲ以テ嚆矢トス」

(次回につづく)

3. 首都ラパスで、水わずか30リットルを使った入浴体験

ボリビア在住フリーランス
コンポストアドバイザー
城井 香里

2018年10月29日、環境水資源省のカルロス・オルトゥーニョ元大臣は「ボリビア全土の水道普及率は90%に達している」と発表した。首都ラパス市に住む友人のAさんの家には水道がなく、週に一度自宅から60メートル離れたところに設置された公衆用の蛇口にホースを繋ぎ、タライやポリバケツに1週間分の水を溜めていた。

10年前に市役所へ水道設置手続きを開始したが、設置されないまま現在に至っている。当時、私はAさんの家に泊まった時に、沸かしたたった30リットルのお湯で入浴するという貴重な体験をした。

オルトゥーニョ元大臣の当時の発表によれば、ボリビアの水道の普及率は都市部では95%、農村部は66%と差はあるものの、それまでに12年かけて計画的に普及に努めており、

2025年までに100%の普及を目指していると言う。



写真3-1 Aさんの近所の様子

しかし、その水道普及率95%であるはずの都市部、首都のラパスに住むAさん家族の家には水道が来ていない。Aさんの祖父が65年前に土地を購入し、親戚一同でそこに引っ越してきた。その場所は崖の上で、下から水道管が引かれ家まで「水道管」は来ていた。しかし水圧が低く、上方に住むAさんたちの家までは水が届かなかったため、決まった曜日と時間に下方の各住民宅の水道管の栓を閉めて断水させ自宅への供給を可能にし、その間に一定の時間、ポリバケツや盥（タライ）などに水を溜めていた。下方の住民と合わせて15軒で一つの水道メーターを共有して、下方の住民とは使用水量に明らかに差があるにもかかわらず、水道料金は割り勘であり、ひと月60ボリビアノ（約900円）と、水道の基本料金の約6倍もの額を支払っていた。

Aさんによれば、約20年前水道協同組合の職

員が家に調査に来て「お宅に水道メーターを設置し、上方から水道管を敷いて安定した水を供給します」と言われた。「やっといつでも好きな時に水を使えるようになる」と期待していたものの、最終的に自治会長の承諾が得られずに、設置できなかったとのことだった。その理由は聞けなかったが、新たに水道管を敷き各家庭に水道メーターを設置するには、市役所に承認された地区（Planimetría a probada）であることの認定が必要で、Aさんの父は10年前にその申請をした。後に何度も市役所に足を運んだが、一向に話が進まなかった。

たまりかねて市役所の法律担当や市議会にも相談した。市役所は、「わかりました。すぐに担当に確認しどうなったか、ご報告します。2日後に来てください。」と言われ、日を改めて市役所に行くと何も話が進んでいなかった。市議会に相談すると、当日調査してもらえたものの調査結果は共有してもらえなかった。これは市役所など公的機関との相談においては、その時々で結果が違ってくるといふボリビアではよくあることである。

そしてAさんの父はやっと2年前になって、崖の上方に水道管を設置してもらうことに成功した。しかしそれは、各家庭までではなく公衆用の蛇口までであり、冒頭に述べたようにAさんの自宅からは60メートル離れている。現在Aさん家族を含む近隣住民9軒は、決まって毎週土曜日朝7時に集まり、「共有の公衆蛇口」に近隣住民共同使用のホースを接続し、自宅まで続くホースを使って、それぞれ家のポリバケツや盥などに一週間分の水を貯めなければならない。



写真3-2 公衆の蛇口からホースで家庭まで水を供給

「その量は1週間に1000リットルくらい」とAさんは話す。水道名義はAさんの父で、料金は9軒で割り勘しており、月あたり20ボリビアアーノ（300円）程度である。9軒のうち水が足りなくなった家庭はAさんの自宅にホースを借りに来る。この場合は追加分として多めに水道代を払うと申し合わせている。

Aさんは3人家族だ。この一週間分の水1000リットルで料理、食器洗い、洗濯、入浴、洗顔トイレの水などすべての水を賅かなっている。私がAさんの家に宿泊したとき、Aさんのお母さんがお湯を沸かしてくれてバケツに注いでくれた。水を足して温度を調整しながらちょうどいい湯加減にすると、「さあ、どうぞ。これで入浴してください」と言われた。

20リットルのバケツ1杯半で入浴。初めての経験だ。まず私は服を脱いで空の大きなタライのなかに立った。一杯あたり1リットル入る水差しを使いながら髪を濡らし洗髪した。使った水は足元のタライに溜まっていく。そして次に体を洗った。少し足りなくなったので、2杯目のバケツのお湯を半分使って洗い終

えた。お風呂から出て、タライに溜まった使用済みの水はどうするのかと聞くと「トイレの水に使うからそのままにしておいて」と言われた。私は衝撃を受けた。「こんなにも水を大切に使ったことが私の人生であっただろうか」と。そして工夫すれば入浴の水もここまで節約できるのだということも分かった。普段、AさんとAさんの父は自宅で週に2回入浴しているが、Aさんの母は、徒歩10分のところにある市場の公衆シャワーで入浴しているという。



写真3-3 盥に貯めたお湯で入浴

首都のラパスに水道がない家があるというのは私にとって意外だった。「自分の家に水道があったらどれだけいいことか」「このような状況の家は自分たちだけではない」とAさんは話す。Aさんを始め、同じような状況の家庭に、蛇口をひねれば水が出る、そんな生活が早く実現することを心から祈っている。

（終わり）

4. ボリビアでの新型コロナウイルス： 蔓延とその対応状況

日本ボリビア協会専務理事
杉浦 篤

発生状況と初期の対応

2020年2月末に中国から韓国・UAE・ブラジル経由ラパスへ帰国した男性1名と、3月5日と7日にスペイン・イタリアからスクレとサンタクルスへ帰国した男性2名に症状が観られたが、検査の結果いずれも陰性と判定されていた。

しかし、3月11日にイタリアから帰国したサンタクルスとオルロ在住の女性2名が感染者と判定され、アニェス暫定政府は翌12日にボリビアでの初の新型コロナウイルス感染発生に対して、3月末を期限とする緊急事態宣言を発令した。

続いて3月13日には国内全ての航空便停止と学校休校が発令され、マスクや消毒用アルコールの買占め処罰が通達された。3月14日には国境が閉鎖され、翌日15日には中国・韓国・イタリア、スペインからは入国禁止となった。感染症専門家の元保健省感染症対策室長のバレンシア氏が、クルス保健相により新型コロナ対策の司令塔に任命された。また、政府と議会の間で緊急対策会合が持たれた。この時点でボリビアが国境を接するブラジル、ペルー、チリ、アルゼンチン、パラグアイの5か国では、既に二桁の感染が発生しており、ボリビアへの感染拡大は必至の状況にあったが、この時点でのボリビアの感染者はまだ10人、疑似感染者がサンタクルスで40人、コチャバンバで10人という状況であった。

このような状況の下で、アニェス政府は直ちに下記の緊急対応措置を断行した。

3月17日、100人以上の集会禁止、オルロ、ポトシ、スクレ、タリハの4都市封鎖

3月18日、子育て世代向特別給付金支給、企業借入金返済猶予、ライフライン停止禁止

3月22日 国内諸都市完全封鎖と隔離(4月4日迄) 全国的移動外出制限、国際航空便完全休止、を閣議決定、民間・官公庁の業務停止指令(金融機関、病院、薬局、電力、輸送は除外)(賃金一定部分補償)

3月30日 与党MASと野党のアニェス派や各党が新型コロナ対応で結束に合意。

3月31日には緊急事態宣言後約3週間で、感染者97名と約10倍となり、初めて死者も5名発生。

4月1日には 日本政府がボリビアからの入国を禁止、4月3日には 中国からマスク10万枚が到着。この時点ではベニ州はまだ感染は0。

4月20日に ラパスでマスク義務化。観光業中心に10万人の雇用が喪失。ベニ州で最初の感染者2名発生。

その後の経過

4月28日になると 感染者1014名と1000名突破し死者も53名

5月1日には PCR 検査日当たり1万件体制へ強化、翌日2日アニェス政府は60万人の雇用創出策を発表

5月6日 このころからベニ州の感染が急増し、医療崩壊の虞。

5月7日 ナバハス保健相が5月末の感染者数を1万人と予測(実績9592名、死者310名)。政府は緊急事態宣言を5月末まで延長。

5月8日 感染者・死者共に倍増し2081名

死者 102 名

5 月 9 日 ラパス、サンタクルス、コチャバンバ医療崩壊に直面、検査機関も飽和状態、医療機材の供給が追い付かず、感染の危険を避けて、ベニ、オルロで病院の医師・看護師が離職。

5 月 12 日には各地で、医療関係者、警官、兵士、記者が多数感染。

5 月 17 日 ベニ州の感染が急拡大し医療崩壊寸前

5 月 22 日 このような緊急時に人口呼吸器輸入不正でナバハス保健相辞任。

5 月 23 日 一方でポトシ、オルロ、コビハ、スクレでは感染が落ち着き、5 月 25 日から封鎖を緩和。

5 月 24 日 全国の感染者は 6000 名、死者は 240 名に。

5 月 26 日 政府は感染が急拡大したベニ州へ医師・看護師団 50 名派遣。

5 月 28 日 ベニ州人口当り感染率が最高となり、医師が各家庭を個別訪問して感染者の把握・隔離・治療を実施、全国の感染者は 7768 名、死者 280 名。

5 月 30 日 州毎に状況が目まぐるしく変化し、ラパス・コチャバンバ・オルロは封鎖緩和、サンタクルス・タリハ・ポトシは継続に。日本の援助物資 450 万ドルが到着。

6 月 2 日 感染発生から 83 日で感染者 10531 名と一万の大台を超え、死者も 343 名に。

6 月 7 日 大統領の再選挙日程が 9 月 6 日(決選投票日 11 月)に決定。

6 月 10 日に 感染の疑いがある患者が急増しサンタクルスの PCR 検査機関が破綻。

6 月 13 日には 4 大都市(ラパス、エルアル

ト、コチャバンバ、サンタクルス)で再び感染者が激増、サンタクルス州では無症状感染者急増で 24 行政区域が 6 月 30 日まで封鎖。日本の援助で建設されたサンタクルス市重要医療拠点の日本病院が医療要員の半減と患者満員のため崩壊寸前。ラパスの医療関係者が機材不足に抗議して時限スト。

6 月 14 日 ボリビアの感染者数 17842 名(世界 197 か国中 47 位、ラテンアメリカ 33 か国中で 10 位)が日本の 17403 名(世界 49 位)を追い越した。

6 月 17 日 アニェス暫定大統領コロナ感染激化を理由に再選挙を 9 月 6 日から 1~2 か月再延期を示唆したが、選挙管理委員会のロメロ長官は難色、議会で多数を占める与党の MAS も反対を表明。

6 月 18 日 最初の感染者発生から 99 日で感染者 20685 名(総人口 10 万人当たり 172 名)死者 679 名(同 5.7 名)となった。

アニェス政権の対応について

上記のとおり、感染発生後のアニェス政権の対応は決して緩慢ではなかったが、この度の大規模感染には不十分な都市・地方の医療体制、冷蔵庫を持たず毎日バスや徒歩での食料・日用品買出しが必須な大家族暮らしの多数貧困層の存在、親族や親しい友人間の頻繁な屋内外の接触など三密的な日常の生活習慣、順法精神不足による外出自粛不徹底など、感染防止に不可欠な社会・生活条件の未成熟が重なり大感染を招いたと考えられる。

感染の終息には今後できるだけ早期に再選挙が行われ、国民の総意に沿った平時の安定政権への平穏な移行が望まれる。(了)

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

1 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9

『100 años de historia de la inmigración japonesa en Bolivia』

スペイン語版を原典として2012年までを追補 在庫多数

2 『ボリビアを知るための73章』 (第2版)

2013-2 明石書店刊行

※1は2500円、2は2000円

(いずれも税・送料込)

※ご注文は下記当協会までメール又は電話でお名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡ください。

admin@nipponbolivia.org 042-673-3133

※口座番号、名義人は発送時に連絡します。

協会関係活動の近況

3月24日 2019年度第3回理事会

新型コロナウイルス感染蔓延により中止し、
書面による同意決議に変更

4月9日 2020年度第1回・第2回理事会

新型コロナウイルス感染蔓延により中止し、
書面による同意決議に変更

5月25日 2020年度定時総会・第3回理事会
新型コロナウイルス感染蔓延により延期

6月25日 2020年度定時総会・第3回理事会
開催 代々木(有)西協商事・会議室

ボリビア関係近況

5月1日付で、在サンタクルス領事事務所長に大野政美領事が発令され、7月初旬に赴任の予定です。

6月8日、伯耆田修新駐ボリビア大使が赴任しました。

※4月~6月のイベントは、新型コロナウイルス蔓延による緊急事態宣言に基づき全て中止または延期されました。

編集後記

渡邊英樹さんのご寄稿は「ボリビア旅日記」としてその5まで連載いただきました。引き続きその6からはタイトルを「ボリビア回顧旅日記」と改め、同氏がボリビアを訪れて、様々な人々と旧交を温め、懐かしい事物に触れることで、ボリビアに滞在していたころの様々な思い出を回顧するものとして連載いたします。

ボリビアでの新型コロナウイルスの感染状況については二人の寄稿者が取り上げました。日本では感染はやや落ち着きを見せてはいますが、終息にはまだまだ時間が掛かりそうです。皆様、くれぐれも用心され、ご無事で過ごされますようお祈りいたします。

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

Copyright© 2002-2020

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)